

1998

春の黄土高原ワーキングツアー 体験記

第1班:1998.3.26～4.4

第2班:1998.4.16～4.23



緑の地球ネットワーク

〒552-0002 大阪市港区市岡元町 3-9-16

TEL 06-583-1719 FAX. 06-583-1739

E-MAIL : gentree@ma.kcom.ne.jp

1998年春は2つのツアーを派遣していますが、ここに収録したのは第2班のものです。

●4月16日(木)～17日(金)

【I・S記】

関空から北京へ。期待半分、不安半分。

大国・中国の政治中心都市、北京の第一に感じたこと、以外にも田舎町風。だが、少し冷たさを感じる人びと。

それにひきかえわれわれメンバー、ひとりひとり個性的だが、和気あいあい。重慶飯店で食欲も満ち、いざ大同へ……。夜行列車にて8時間の旅は、初日には少しきついな。食事を終えて、ロビーで書いていますが、カラオケ嬢の笑顔に少し色欲もでてきて、元気いっぱい。

北京駅 11:21 発の大同行列車に乗り込む。一行、軟臥と硬臥に別れわかれ。座席(寝台車)指定であることはすくない。ねむりこんで少したつと、列車は待ち合わせのため駅のようなところで停車。そのとき、同じ列に乗っている客のいびきの合唱、気になってねむれない。それが不思議と列車が動きだすと、列車の音に消されていびきが気にならない。雑音には雑音が一番いいことに気がついた。

大同に着いて、このボランティア活動団メインの植林に想像していた以上に(カラカラの土地)、ねばりがあったように感じた。私はあまり手助けはできなかったが、おかげさまで農家の人びとの精力的な労働により、かなりの広さのモンゴル松の植林が完成。

苗木は小さいが、これからの成長を楽しみに大きな期待。残すことの楽しみを味わい植林の地をあとにしました。

〈感〉貧しい地域なのかもしれないが、一次産業の“たくましさ”“楽しさ”“かなしさ”複雑な思いをいただいた2日間でした。

【I・T記】

書き出しの榮譽をいただきながら、右肘手首関節のコントロールを失い筆記が困難となったので、字の汚いことをお許しください。

16日 13:30、関空 4F、Eカウンターに集合。総勢9名、小じんまりとした編成。太田、東川両女史に見送られ、15:40 分出発。Tリーダーのにぎやかさは、落語の野崎詣りの語り口「…そのにぎやかなこと……」のようで、なんとなく旅の楽しさを予感させるものがある。

ほぼ定刻通り北京空港着。橋本カメラマンと留学生のN、Tの両君などの出迎えをうける。驚いたことに空港広場の自動車はどれも灰をかぶったよう。聞けば昨日黄土高原で大竜巻が発生、黄砂を巻き上げたのが原因という。緑を待ち望む、黄土高原の渴ききった大地の、われわれへの切なる願いのようである。

夕食、そして北京駅へ。2、3年前に来たときとは、街のようすは、ネオンが増えビルも増えている。しかし街の混沌は一層ひどくなっているように思える。かつて日本もこのような混沌があった。そして繁栄し、心の荒廃も経験している。

列車も定刻に発車。

17日朝6時前目を覚ます。大きな太陽は褐色に近い橙色をしている。黄砂を物語っているのだろう。

沿線の木々は芽吹き、ほんのりと緑をまとっている。白い花と少し桃色の花が咲いている、杏の花だろうか。カササギも、一段とたくましくなったようだ。

6時40分、大同駅に定刻に着く。高見さん、遠田先生の出迎えをうける。雲崗賓館で朝食。9時40分～11時30分頃、陳庄郷でモンゴル松苗の植樹。賀夫妻と作業。右肘が痛み腰も痛む。私の作業の中断に関係なくバケツの松苗は減っていく。この若い松が本当に育つのか、大きく育った松とふたたび会いたいものだ。

昼食、14:30から中学校の見学。学校併設の寮があり、1部屋7人～8人が寝起きしている。日本では想像もつかない教育環境である。生徒は目を輝かせている。

夜、張さん宅でホームステイ。

4月18日（土）午後晴、黄砂くもり

【K・S記】

ホームステイを農家でする。大同県陳庄郷陳庄村、民宿でわかれて泊まる。

AM8:00 集合。全員健康で楽しいホームステイを終えて集まる。一人一人笑顔で!!

遠田、T、K

高見、I、N

I、橋本、□

W、T、M

N、F、W

ホームステイ、農家に分散するグループ

大同県中高庄郷金山寺で植樹作業

AM9:30～11:00

現地 11:00 頃出発。中高庄郷政府着 11:50。昼食、12:00 より。郷政府にて。小生午後より大同市センターに帰り、皆様より先に帰国をします。

今回いろいろ学び、本当にうれしく思いました。本当にありがとうございます。

【遠田宏記】

Kさんは昼食後、センターの北京ジープで大同へもどる。今夜はセンターに泊まるとのこと。Kさんの人気は 18～22才の娘さん3人の存在のせいかと娘のいない私は少々ヒガみもするが、明るい素直な娘さんを3人も!! 育てた人格のせいであろう（息子さんも元気潑刺のスポーツ少年とのこと）。

13時すぎ、午後の予定地遇駕山の植林地に着く。12年生のモンゴルマツには虫害の拡大は心配していたほどではないように見受けられたが、ルーペで見ると紅色のハダニが動きはじめた冬芽周辺に見られ、今後どのようになるのか心配である。シーズン中に10回以上も世代を重ねるハダニは、途中の気象条件で急激に増えることもあり注意を要することだと思ふ。線虫検査のためのサンプルを採取し、同時に年輪解析のための資料を採取した。

政府招待所で旅券の提示を求められる。外国人の立ち入りには許可の必要な地域であることは事実であるが、それを盾にとつての旅券の提示を求めるなどのことは、今までの協力関係をどのように理解しているのか、極めて不愉快である。食後、県の青年団書記とこの問題につき話し合い、かなりきびしい意見を率直に伝え、また橋本さんの取材に対して全面的な支援を求めた。若い書記は全面的な支援を約束したが、われわれはその結果をみて彼の努力を評価することを伝えた。事務的な食いちがいやトラブルは許せるが、協力関係の基本にかかわることには、いかにきびしくとも素直な意見を伝えることが今後の発展のためには不可欠のことと思われる。

夜、各部屋で大いに盛り上がる。毎度のことながら小生もウイスキーを飲みすぎて目の前がチラチラするままこの日記を書いている。モーダメ、オヤスミ。

【橋本紘二記】

昨夜泊めていただいた陳庄郷の農家は、私が昨年春節のときに泊まった家だった。張夫婦はごちそうをたくさんつくって、いろいろ細かいことにも気を配ってくださる。例のごとく村の中を撮影して歩いていたら、朝食の時間だと張おじさんが私をあっちこっち探して見つけ、迎えに来てくれた。

午前の行動は、昨日と同じ植樹作業。中高庄郷金山寺に移動する。金山は火山で、大昔に数回噴火し、溶岩を流したらしい。黄土と溶岩、土砂の層がサンドイッチになっている。

私たちが植樹したところは、以前から、中国側がポプラなどを植えているところで、その一面に植えた。植樹の穴は、サークル状に掘ってあった。たぶん中央に記念碑を建てるのだろう。

小高いところで、見晴らしのよいところなのだが、黄砂が舞い、風景はかすんでよく見えない。

今年は例年より春が早いとのこと。アンズの花も散りかけている。どこの畑でも春耕の真最中だ。

中国に来てから、ノドが痛い。カゼかなと思ったが、熱はない。黄砂がノドに入り、気管を痛めつけられたようだ。セキがでて、タバコもまずい。

郷政府で昼食。

午後は遇駕山の造林見学。遠田先生たちは調査用にと1本、松を切る。天鎮県の招待所に向けて移動。

私だけは特別のはからいを受けて、ジープに乗っているのだが、大同市までKさんを送っていくので、午後からは皆と一緒にバスに乗る。

バスの中では遠田先生がマイクを握り、あれこれと説明してくれていた。皆が疲れ、寝たいように遠田先生の説明は続く。先生はもう中国滞在は1か月になろうとしているのに元気だ。

夕食の後、コココーラのIさんの部屋に集まり、ウイスキーを飲んでいると、遠田先生が「若い人たちと話をしたい」と入ってきた。先生は、身を乗り出し、手を動かし、口に熱をおび、話が止まらない。先生はすっかり青春している。停年退職したのに、黄土高原に来るようになって、新しい研究課題が見つかり、学生のような情熱がよみがえったようだ。うらやましいか

ぎりだ。

遠田先生の話は 11 時まで続いた。

●4 月 19 日（日）晴

【遠田宏記】

天気はよいのに相変わらず黄砂のため視界は悪く、遠くの山やまは見えない。南と北の両方に東西に走る山脈が美しく見えるはずのものが、そのシルエットがぼんやりと見えるにすぎない。一雨くれば泥水のような水滴が落ちてアッという間に視界は開けるのだが、この時期の雨はないものねだりである。

午前は遼家湾鎮百舍科小学校の希望果樹園のアンズを植える。気温は次第に上昇し恐らくは 27～28 度近くまでいったのではないかと思われ、汗をかきながらの作業となった。現場は大小の石やレキの混じった砂地であり、苗の発根には最適であるが、水は抜けやすく今後の水管理いかんによって結果は決まるであろう。用意されていた苗の状態は最良のものとは言えず、苗管理の技術的な面はもちろんそれ以上に生きものとしての植物に対する意識に問題があるように思われる。さいわいアンズは乾燥に強い樹種であるから、これ以後の管理がよければかなり（半分以上）活着すると思うが、他の樹種なら全滅であろう。

遼家湾鎮の農家で昼食をとる。この村は極めて貧困であり、不作の昨年は 1 人あたり 140～150 元の収入しかなかったと聞いていたが、農家の主人は昨年は不作だったが、その前年は豊作だったとあまり深刻な顔もせず話すのは外国人むけの顔なのであろうか。聞き取り調査の困難さを感じる。主人の話とはまた別に、食後見てまわった村の上の方（標高の高い部分）の家の大半は空き家であり、無残ともいえる状態であった。主人の話では、井戸は以前と同じように水が出るので水不足のためではないとのこと。

高見さんによれば、村の人口はどんどん減少しているとのこと、貧困からの脱出、離村が進んでいる村なのであろうか。

食後、小学校で子どもたちと交歓をするが、昼食の時のビールのせい、眠気におそわれ必死の努力をして目を開く。予定に追加して万里の長城を見に行くことにする。この鎮の西 10（？）キロほどのところには山の嶺から長城が降りて山すそを西に走るめずらしい場所があり、以前から双眼鏡では見ていたのだが、現場へ行くのは初めてである。明の時代に補修（改修）されたと聞いているが、観光用ではない長城は、それなりの時代の流れを感じさせるものであった。

長城へ向かう途中、黄砂の嵐に巻きこまれた。バスは突風とともに猛烈な砂けむりにつつまれ視界は 30m 程度であろうか。10～20 分ほどで嵐は過ぎていったが、先週は丸 1 日吹き荒れて大変だったことを思い出した。

夕食後、昨夜につづき県の書記をよんで、苗の管理から意識の問題、今後の協力のあり方などを話し合う。かなりきびしい話になり激論ともなったが、いくつかの課題を彼らに示し、考えかつ実行することを求め彼らも了承した。その結果を見てさらに話し合うことにする。

彼らが帰ったのは 10 時半であり、その後高見さんとチビリとやりながら話し合い、ねたの

は 12 時であった。したがってこの日記は 20 日朝に書くことになった。サア、また今日が始まる。

【高見邦雄記】

百舎科村でアンズを植えた。たくさんの子供たちがでてきて、手に輪をもって「歓迎・歓迎・熱烈歓迎」を繰り返す。もう少し若い人たちなら、感動はさらにおおきかっただろうが、この団は平均の年齢が高いし、リピーターが多くて、こういうことには慣れている人のおおい。こういう場面で感動するかは、やはり参加して、それを受けとめる人たちによるところが大きい。

ここでは 500 ムーの果樹園を造成中だが、そのうち私たちが協力する小学校果樹園は 100 ムーだ。ことしは春の訪れが早かったから、たいていのところはすでに植えおわっていて、私たちのために一角だけが残されており、穴も掘ってある。

一般的な黄土高原とここがまったくちがうのは、河川敷のような砂地であることだ。山が近く、そこから流れてきた砂や小石がたくさん混じっている。最初にバケツ 1 杯の水をいれてどぶづけにし、それから土をかけて、さらに水を 1 杯注ぐ。それらの点はとても行き届いている。

もし苗木さえよかったら、活着はまちがいないだろう。私たちが弱った植物を砂に植えて復活をはかるようなものだ。

しかし肝心の苗がよくなかった。ほかのところを 3 日前に植えたときは、元気でよかったというのだが、それからあとずっと放り出してあった。いまでも平気で日向においてある。それを補うためだろうか、1 つの穴に 2 本ないし 3 本を植えていく。

アンズの木はとても乾燥に強く、信じがたいほどの力をもっているから、ある程度は活着するかもしれない。小楊が「高見、この苗木をどう思うか？」とききにくる。彼も不安なのだろう。山西農業大学で林業を専攻したとはいっても、現場の体験はほとんどない。「まあ、なんとかなるだろう」と答えながら、「どうして苗木を生き物として扱ってくれないのだろう」という怒りがいっそう強まってくる。

この団は比較的小さいし、必要な写真・ビデオはだいたい撮っているから、今回はあまり撮影しない

で、労働に加わっている。みんないっしょうけんめい働いているのに、下手をするとここでの作業はまたまた空振りに終わるかもしれない。自分もちゃんと働かないといけないと思った。

水はトレーラーに積んだドラム缶のタンクで村から運ばれてくる。1 本につき、バケツ 2 杯をつかうぜいたくな植え方だから、すぐになくなる。そうするとまた運ばれてくるのだが、それを待つあいだが休憩になる。

11 時をすぎたころ、小魏が「高見、ここらで終わろう」といつてきた。たしかに潮時だろう。

村につき、4 つの小グループに分かれて、それぞれ農家にはいった。私のいったのは村長の家だった。46 歳だという。

長男は 24 歳だが軍にいつている。次男は 22 歳で太原で針灸医になるための専門学校で勉強している。三男は中学校を卒業したばかりで、いまは大同の炭鉱で臨時工をしている。驚いたことにさらにその下に 6 歳の娘がいた。

彼のつれあいはなかなかの美人で、この村の出身だった。自由恋愛で結婚したのだそうだ。こういうことはこの一帯の農村ではめずらしいことだ。6 歳の娘もなかなかかわいい子だった。

男の子たちを外にだすことを早くから決めたのだろう。「自分たちの老後を養ってくれる子供がもう 1 人ほしくて生んだ」とそのあるじは語るのだが、それが女の子だった。

この村の人口は急激に減っている。80 年ごろのピークには 1,800 人いたのだそうだ。それが 90 年ごろに 1,000 人を切り、いまでは 800 人弱になっている。そのかんの事情はことし 1 月の日記に書いた。きょう果樹を植えたところは、もともとは村をでた人が耕していたところなのだろう。いいところはほかの人が使いたがっても、村から遠い不便な畑、やせた畑だとかは耕す希望者がいない。そういうところに果樹を植えようというのだ。

ここは水の便には恵まれているし、交通もそんなに不便ではないように思えるのだが、いったん出稼ぎなどがはじまると、このようなかたちでの崩壊がいきよにすすむようだ。

小学校を見学し、記念品を贈呈した。全部のこどもと村のかなりの人たちが集まって、教室にぎゅうぎゅうづめになり、窓の外からも見守っている。

村での活動をすこし早めにきりあげて、宣下塔郷李二口村まで行き、万里の長城をみることになった。北京のほうから山の稜線をずっと貫いてきた万里の長城は、この村のところで山裾に降りて、さらに西にすすむ。そしてもういちど山に駆け上がるところが陽高県の守口堡村だ。

途中でマイクロバスがエンストした。たまたまそのときものすごい風砂がやってきた。数十 m 先がまったくみえない。助手席に移って。フロントガラス越しにビデオで撮影した。また助手席の窓越しに横の角度のところも撮影した。春の黄土高原にくるときも少なくはないのだが、これほどの風景ははじめてだった。仮に外でこのような場面にであったとしても、あまりに風砂がきつすぎて、撮影はできなかつただろう。その意味では最高の状況でこの場面にでくわしたのだ。

しかしそのとき、老馬はマイクロバスの車内にあるエンジンカバーをあけて、なにかの修理にとりかかっていたのだが、そこから黄砂が吹き上げてきて、フロントグリルあたりが一瞬にして灰色になった。いやあ、ほんとにすさまじいものだ。

このかん、バスのなかでの説明はほとんど遠田さんに任せきっている。橋本さんが遠田さんの話をきいて、「遠田さんはいったいどうしたの？ ものすごく積極的じゃない。まじめな人だから、はっきりしないことはこれまで話さなかつたんだろうけど、何回も何回もここにきて、自分の考えに確信がもてるようになったんだろうな」といつている。

そのことには私も気づいついて、遠田さんにも「先生、今回はすっかり化けてしまいましたね。植物の専門家って感じじゃないですよ。たとえ同じ内容でも、先生が話してくれると、私の 10 倍くらい信頼性がありますよ」といつてマイクを渡しっぱなしにしてきたのだった。

遠田さんは、「いやあ、若いときは人文地理をやりたいかったですよ。いまは大学院の博士課程とまではいかないけど、修士課程くらいの気持ちでいますよ」と答える。仙台にいるとき

も、ずいぶんといろんな文献をあたって、このさまざまな問題を勉強してくれているようだ。

万里の長城の脚下にいった。Iさんはものすごいカメラをもってきて、いい写真を撮りたがっている。長城の上にあがると、いい角度で写真が撮れますよ、とって案内した。ノロシ台にも上がった。橋本さんはあちこちで写真を撮っているようだ。長城からちょっと離れたところに、ひとまとまりのポプラが生えており、それがトピアリかなにかのように変わったかたちをしている。前回にきたときからその木の写真をぜひとも撮りたいと思いつづけていたのだそう。

夕食のとき、共青团副書記の小陳があいかわらずのチャランポランの態度をとる。どうしてこの男はいつもこうなのだ。頭にきて、「どうしてちゃんと苗木を保護しておかなかったのだ」ときびしく文句をいった。書記の小〇は、「村にいて、水につけ、根に土をかけておくように注意したのだけれども、村の人たちは、だいじょうぶだ、これまでもこれでちゃんと活着するといった」という。「村の人がそうやって動こうとしないのなら、あんたにだって手はあるんだから、自分で処理すればいいじゃないか」とさらに詰め寄った。この男はひじょうにまじめな男だから。ちゃんとやるようになれば、しごととはできるはずなのだ。

小魏が横から口をはさんだ。私は彼のことが聞きあやまって、彼に怒りをむけてしまった。彼は「苗木の一部分は、枝を折ってみるともう生気が感じられなかった。だから、途中でしごとを切り上げるようにいったのだ」ということだった。

その夜、遠田さんの部屋で、中国側の何人かときょうの問題についての話し合いを継続した。話しあいというより、こちらはケンカ腰になってしまった。「ついこのあいだは共青团中央の曹衛洲国際部長がきて、ここでの協力活動を高く評価したそうだが、実際の現場でこんなことがやられているんだっただけかたがない。人をだますようなことはしたくないから、4月末から予定されている国際青年ボランティアキャンプも返上するように、祁学峰にすぐ電話をかけてくれ」といった。冗談とも思えないし、まさか本気ではないだろうと、彼らは対応に苦労している。

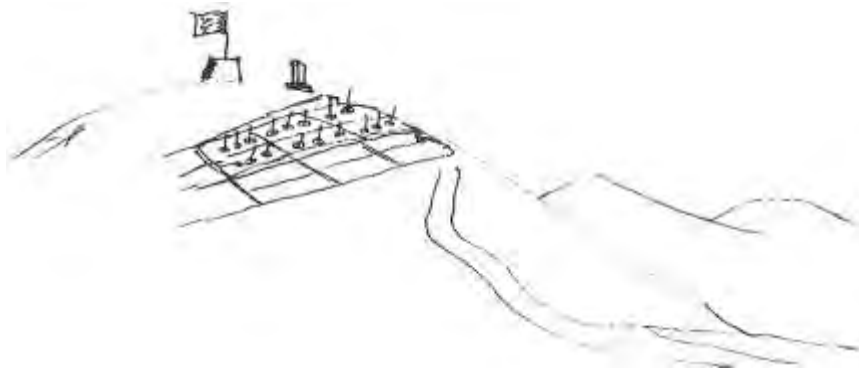
これまで、こういうときの通訳は王萍ではむずかしかった。それが今回は安心してできる。悪いことばかりではない。

●4月20日（月）晴

【N・K記】

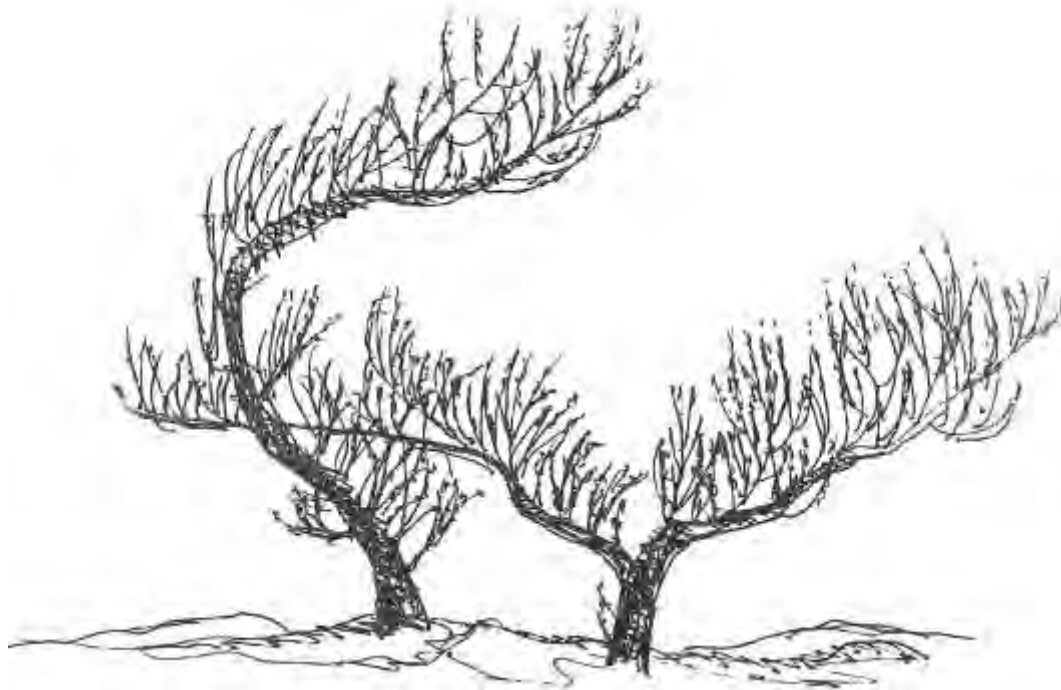
午前中の作業は標高 1300m の山頂で、こういうところに木が育つかおおいに疑問を抱きながら、子どもたちといっしょに植樹をした。午後は、大同市天鎮県休暇村で温泉に入りおおいに満足。大同市にもどる途中、ガス欠になって立ち往生しても苦にならなかった。

このワーキングツアーは 2 度目のチャレンジだけど、前回と場所が異なるのでやはり緊張感と好奇心は充分あった。ただ、春の黄土高原での植樹は、砂との闘いでした。水もすくない、砂地の大地に木を植えようなんて、バカげたことのように思われるが、もっと長い時間、10年、20年、50年、100年先のことを考えないとやってられないでしょうね。村が豊かになるためとか、中国人の意識改革をするとかは、私にとってはこの使命にあらず。



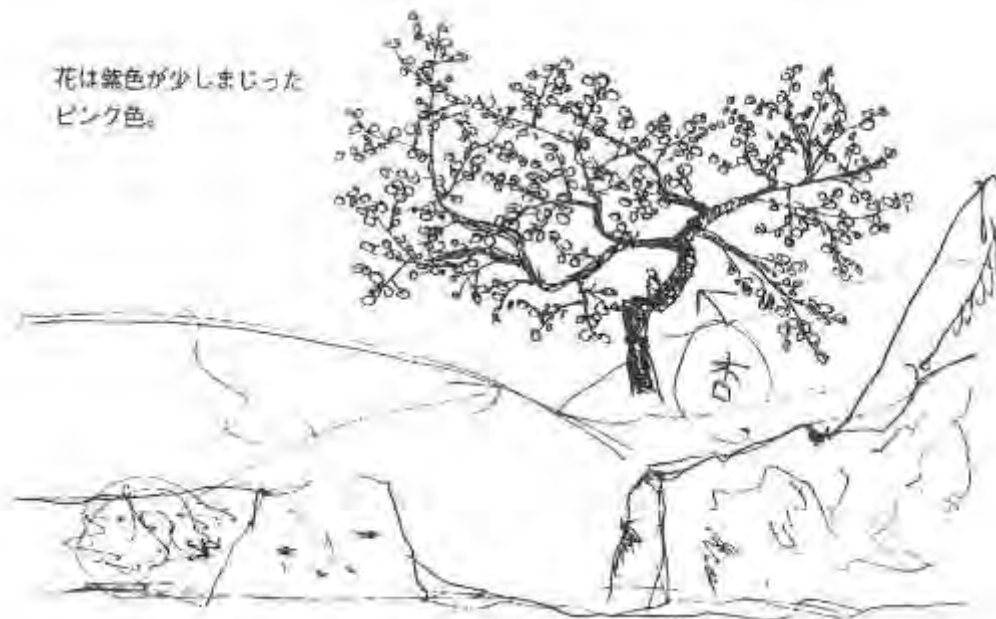
また人の苦勞話、
過去の話もあまり
興味のわく話では
ない。もっと前を
向いてやっていき
たいと思うから。

中国の“カンペ
ー”に腹が立つ。飲



これはポプラ。風が強いため曲がっていました。別名Nポプラといいます。

花は紫色が少しまじった
ピンク色。





砂嵐のため、約10分停車。

めない人を強引に飲まして、何が熱烈歓迎だ。中国熱がいつぱんにさめてしまった。それしか能がないのか。天鎮県の現地協力委員の無能さ。仕事はしない、ただめし食らい、のめ！ のめ！ こんな奴らは、不用

だと思う。彼らに問うてみたいのは、地球緑化というGENの活動に対して、どう思っているのか、どのように取り組んでいるのか、ワーキングツアーメンバーをどういうつもりで受け入れているのか、を。

それにしても北京からの通訳、ウェイさん、全くの役立たずだったな。いい人なんだけどね。

黄砂の砂嵐をまともに受けた。バスの中だったのでよかったけど、視界 10m、すごい砂。バスの中も、窓を閉め切っているのに、もうもうとして、ノドがカラカラ。でもおもしろかったです。これで舞い上がった砂が、近いうちに日本に行くんだろうな。

【F・S記】

6時に起床、窓の外では小学校の校庭で子どもたちが遊んでいる。当地の朝は本当に早い。昨日の「乾杯！」はビールにしてもらい、10時間以上の睡眠をとったおかげですこぶる快調。昨日の昼にダウンしていたNさんも復活したようだ。

朝食前に、街を歩く。週はじめということもあり人出がたくさんあり、活気のある朝であった。この時間から市(?)が出て、豚の半身(!)、野菜、りんご等の店が出ていた。店の配置は誰が決めたのか、肉は肉、野菜は野菜と分かれており、わかりやすい配置となっていた。

食後、張西河郷丁家烟村にて植樹作業。村の人たちとあんずの木を植える。バスでも登れず、徒歩なら村から1時間はかかるかという山の頂に植えるあたり、いかにも中国共産党らしいということだ。

木を5、6本も植えたろうか。一緒にいた史艶暁という少年に引っ張り回され、クタクタに疲れた。記念碑も建ててあり(碑文は忘れました。覚えている人書いてネ!)、除幕は私と校長でやった。歴史的一瞬と言えよう。

それにしても、何故このようなところに植えるのか、他にもっと植えるのにふさわしい場所はなかったものかと思う。天水も地下水もあまり期待できない山頂では、植える甲斐もないのではないかと思う。

が、あんずは不思議な生きもので、松より強かったりもするというから、少しは期待もできるのかもしれない。5年後、たわわに実ったあんずの実で、村がうるおうのかどうか。楽しみなものだ。

昼食は招待所にて。メニューは

- ・ピーナッツの炒めもの
- ・豚肉のくんせい
- ・胡瓜、もやし、大根のあえもの

- ・大根のつけもの
- ・ネギとニラの炒めもの
- ・太刀魚の竜田揚げを煮たもの
- ・いんげんと豚肉の炒めもの
- ・豚肉と胡瓜の炒めもの
- ・肉団子あんかけ風
- ・じゃがいもと豆腐の煮もの
- ・芋団子（山薬魚？）
- ・豆腐と豚背脂のスープ
- ・マッシュルームと豚肉の炒めもの
- ・白米
- ・まんじゅう

で、前日と同じようなメニューながら腹に入る。不思議なものだ。

3年前に橋本さんに日中戦争のことで食ってかかったという老人も同席。橋本さん、なかなかいいペースで飲む。

大同市への帰路途中、温泉につかる。共青团の人たちと一緒にだ。写真を撮ると恥ずかしそうにする。

裸体をさらすことはやはり嫌らしい。こっちだって男（ヤロー）の裸なんて撮りたくないやい！美人の裸体ならお願いしたいけど……。はしゃぐ彼らの姿はほほえましいものだった。

大同市は遠い。3時半に温泉を出てから2時間半あまり、われわれを乗せてひた走ってくれていた馬さん号（名前がわからないからこう書く）がエンコする。ガス欠らしい。放尿してポプラに栄養を与える。

大きくなれヨ！この文はその停止中のバスの車内で記している。もしかしたら3日後、餓死して死臭を放っているかもしれない……。馬さん早くガソリン買ってきて。

路傍に青く綺麗な花を見つける。私の心根のように本当に美しい花だ。ここに挟んでおこう。（編者注：ここにバンドエイドで押し花が留めてあると思ってください）アイリスの仲間（遠田さん談）。しかしもうネタがなくなってきた……。さすがに小学生の日記体では限界がある。ここらで少し雑ながら思いついたことを記そう。

1. ほこりゃゴミで街中は非常に汚い。当然下水道などというものもないのだろう。招待所のトイレには水がながれないためクソがたまっている。

それでも不思議と臭いが無い。食べるものの違いなのか、乾燥地帯のせいなのか判別できないが、臭い対策で苦労している日本の養豚農家にはうらやましいことだろう。←鼻が麻痺したのではないかと高見さん談。

水のサンプルを持って帰ってBOD、COD等測定してみたい（分析下手だけどー）。あと硬度ネ。

2. このツアーの最初のイメージはある範囲の土地を中心に1人100本、200本の苗を植えるというもの。しかし、5本植えて腰が痛くなるような過酷な土地では、田に稲を植えるよ

うなわけにはいかないことを痛感した。そして、われわれの到着前に、苗を入れ、土をかけるだけにしてきている村の方々の努力に脱帽するとともに、いかに中国が統制のとれた、別の言い方をすれば、少し恐いほどの管理社会であることを実感する。指導者を育てるということがどれ程大切なのか、目の当たりにした。

3. 子どもたちの目。好奇心をたたえ、われわれの言うことやることを吸収するその目（感覚？）はすごい。党の教育の賜物だろうが、いまの日本の子どもたちにはない目である。当然私のような学生も、死んだ魚のような目をしているので、大きなことは言えないけれど。

そんな彼らが日常、どのようなことを考え、また将来どのような人間になり職に就きたいのか。聞ければよかったのだが、言葉の壁はいかんともしがたく、今回のツアーでは無理だった。今度来るときは（いつなのかはわからないが）、それくらい聞けるよう、中国語を勉強しておこう！（決意）

4. このツアーにはさまざまな人種（日本人だけだけどあえてこう書きますゾ）がいること。画家あり、写真家あり、等々、それぞれ異なる背景を持ち、異なる思想、習慣をもつ人が、緑化、あるいは単に中国人に対する興味関心かもしれないが、それだけで集まっている。当然自分の旅の目的とは異なるものを持っているわけで。その違いを感じるのも醍醐味なのだろう。

暇な学生が多く、そのなかに女性でも……なんて思っており、ツアー参加者の年齢が若干高くして少しガッカリしていたのが素直なところだったのだが、どうしてどうして、年輪を重ねた人生の先達の話は非常に面白い。ここでつながった人たちとの今後のつき合いも（あるのか？）大いに期待できる。年頃の娘さんを持っている方々、ヨロシク!!! — ウソ。

ここで20日のできごとにもどる。

チェロキーもどきで先行していた人たちが、われわれが遅いのに気づいて戻ってきて、近くのガソリンスタンドから2袋(!)ガソリンを購入、給油のあと出発。

この停車中、高見さんたちは外で草木を観察したり、放尿その他、思い思いに過ごす。Nさんは日誌に絵を画いていたっけ。

大同市にもどり、雲崗賓館に到着。夕食は、しゃぶしゃぶのような料理、美味でした。

明晩はもう列車にのるという旅の終盤をむかえ、すこしさびしい気がする。

いろいろ考え、もっと書きたいこともあるとは思っているのだが、もう11時半、遠田先生と高見さんのレクチャー—ものの見方入門を受けたこともあり、もう遅い。そろそろ寝ようかと思う。同室の魏さん（北京から同行）はイビキをかいて寝ているし。

あ、忘れてました。今日、Iさん、49回目の誕生日だとか、おめでとうございます。私もIさんのようなダンディな大人になりたいなあ（←この言葉、私からの Birthday present）、ということで、お休みなさい。

PM11:37

F・S（まだ23才!）

【高見邦雄記】

いろんな話題がでてきたせいか、それともきのういいたい放題を話したせいか、きょうはな

ぜか力が湧いてきている。

きょうの予定地の張西河郷は県城からそう遠くない。村まではあっというまについた。村の中心に建っているなにか小屋のようなものの壁に、「天無情人有情」と書いてあった。こことはべつの村だったが、家の門に春節のときに張る対聯に「戦天闘地」と書いてあった。こういうところで生活していくと、自然というものは闘争の対象と感じられるのだろう。

きょう植林するのは山の上だという。私たちが乗ってきたマイクロバスではどうてい上がれないから、途中で県や郷のジープ何台かに乗り換えた。私はちょっと周囲の状況もみたいと思って、なんどもジープに乗るよう促されたが、それを断ってずっと歩いて登った。

そうしたことで収穫があった。去年植えたと思われるアンズが全滅している。1本として着いていない。枯れた苗を手で引っ張ると、まったく抵抗なしに抜けてくる。枯れてから時間がたっているから正確なことはわからないが、芽が伸びた形跡もないようだ。植えてそのまま枯れてしまったようだ。

ことし植える場所はさらに条件が悪い。私たちが植えたのは小面積だが、その周囲には地元の人たちの手でずっとアンズが植えられている。

この山のとっぺんにはノロシ台があり、その前が整備されて、記念碑まで建てられている。周囲に何本かかなり大きな油松が植えられており、みるかぎりではその大部分が活着している。5年ほど前に植えたものだという。そのときはこのような条件のところでも油松の大苗を活着させることができるのなら、かなりの技術力とそれなりの条件があるのかもしれないと考えた。

橋本さんは、じつは去年、この場所を撮影にきたことがあったのだそうだ。「そのとき、あのようなマツはなかったはずだ」とずっとあとになってから彼がいった。マツの状態がどうなっているかについては、それなりに観察したのだが、5年まえに植えられたという前提でみただけだったから、その点までは注意しなかった。うかつだった。

最初に除幕式があった。めずらしく私もあいさつした。「これまでで最悪の場所だ。ここでアンズが育つのはとても困難だろう。でも人の管理さえよければ活着する可能性がないとはいえない。これまでの協力活動のなかでも、自然の条件はよくないのに、人の努力によってりっぱに成功させた実例がある。さっき郷の党書記はしっかり管理するとあいさつしたのだから、最低でも月に1回はみにきてほしい。郷のトップがそういう対応をしてくれたら、きっとうるどころがあるだろう」と話した。こういう式にふさわしい内容だとは私も思っていないが、いべきことはちゃんとしておく必要がある。

そのあとで、郷の林業技術ステーションの男が植え方について注意事項を話した。

いったいだれがこんな場所を選定したのか、ききたかった。

彼の答えは、「場所は県と郷政府とで決めた。自分はこの場所にどんな樹種が適するかを考えた」ということだった。

山の頂上で水の供給が少ないし、そのうえに、植物の育ちにくい陽当たり斜面（陽坡）ばかりを選んで植えている。溝を切り、土手をつくって、一定区画ごとに四角く囲んでいるのだが、本来の目的を考えれば、そのなかでいちばん水の集まるところに苗を植えるべきだろうに、そ

うはしないで、まん中に植えている。これだけの整地作業を人力だけでしたのだから、村の大人たち労苦はたいへんなものだっただろうが、肝心の植える位置がこのようであったら、なんの意味もないといっているだろう。腹立たしい気持ちがおさまらない。

みんなが作業しているあいだ、林業技術センターの男とずっと話をしていた。とても頑迷な男だった。去年に植えたアンズが全滅したことにも「去年はたいへんな早魃でどうしようもなかった。しかしことはだいじょうぶだ」という。「たしかに去年の早魃はたいへんなものだった。しかし、早魃はこの県、この郷だけではなかったはずだ。あの早魃のなかでもちゃんと活着させているところがある。ここでは去年とまったく同じ方法をとっているが、ことしも早魃になったら、また全滅させる気か」と追及すると、さすがにこの問題では、それ以上の反論は返ってこない。

郷の党書記にはこれまでも会ったことがある。96年の秋に橋本さんといっしょに内モンゴルとの境にある新平堡鎮の万里の長城のところについて、秋の収穫作業を撮影したことがあったのだが、そのとき案内してくれたのだった。あそこの緑化はわりとうまくいっていた。だからこの党書記もそれなりに自信をもって、「いや、この条件だったらだいじょうぶだと思う」という。「しかし、あそこの鎮は海拔が1,700mもあって、カラマツがよく育つようなところだろ。そういうところとこういう丘陵地とを同一には論じられないよ。天鎮県の緑化はどこもうまくいっていないというと、県の人たちはすぐに新平堡鎮の話を出して、いや、うまくいっている、というけど、海拔ひとつとってみても、大ちがいなんだから。そんなに自信があるのなら、こんどまたきて見せてもらうよ」と話した。

農民が耕している畑はできるだけつぶさないで、荒地を開墾して、そこに木を植えることを、最初にい出したのは私だった。農民が自分たちの食糧の問題を第1に考えるのは当然だし、健全な考え方だといっている。それは尊重すべきだと思うし、今回植えたここの条件が悪すぎるといって文句をいっているのではない。

ここに上がってくる途中でも、そういう荒地はたくさんあり、ここより条件のいいところがあるのに、わざわざこの山の上を選び、しかも陽坡ばかりを選んで植えている。それがあまりにでたらめすぎると文句をいったのだが、そのいっている意味すら、ここの人たちにはわからないようだ。

天鎮県林業局の指導で昨年春に植えた李二烟村も、まったく同じようにして植えられており、みごとに全滅していた。そして今回のこれだ。こんなことがつづくのでは、天鎮県でのプロジェクトは打ち切ったほうがいいのかもしれないが、しかし、農村の条件はここがいちばん厳しい。しかも農民は、ここでもみるように、ほんとうに苦勞して、きちんとした整地作業をしている。どうしたらいいのだろうか。

大同事務所技術部の小楊がきて、「ここはもともとアブラマツと樺条を植える計画だったのに、郷の技術者がかってに仁用杏に変えてしまっている」と訴える。次回にもういちどこの現場にきて、そのときの状態しだいでは荒療治が必要だろう。こんなことばかりをこれ以上、くりかえすわけにはいかない。

昼食は県の招待所に帰ってとった。午後から慈雲寺を見学することになっていたが、みるべ

きところがそうある寺ではないから、予定を変更してもらって、温泉につかった。そのあと、大同市まで帰って雲崗賓館に泊まった。何人かの人たちとはこのかんの事情をいろいろと話したが、少数の人にきぎられている。今回のツアーでは、車のなかではいろいろと話したが、夜、みんなといっしょに話したりする機会はほんとうに少なかった。

4月21日（火）晴（なんだけれども遠くはかすんでいる）、日中 30 度

【N・S記】

6:00 起床予定（昨晚同室の橋本さんと朝の大同を見学に行く約束をしていた）。

6:10 位起床。橋本さんの目ざまし時計で起きるはずだったが、鳴った気配がない。たぶん橋本さんが止めてくれたのだろう。せっせと歯みがき、洗顔をすませ、出かける。

タクシーで町中まで行く予定が全然方向ちがいなところへ行ってしまう、橋本さんのりゅうちょうな中国語で市場のあるところまで U ターン（タクシー代 20 元）。市場のはじめのところでおろしてもらい、露店を見て歩く。朝 1 番にいきなり豚の半身が眼に入る。その先に公園があり、まわりでは、太極拳、ダンス、体操をやっている。さすが中国だ。

橋本さんとカメラをぶらさげ、パチパチととっていると例によって中国人の視線をあびる。

別のところでは、老人たちが自慢の（鳴き声なのか、姿なのか）小鳥をカゴに入れ、いくつものカゴを木につるしていた。1 人の老人が鳥を外に出し、手乗りにさせていた。そのポーズを見た橋本さん、いいアングルをさがし、動く動く。そのすぐ後ろにいる犬に気づかず、まだ動く。気づいたときにはもうビックリ、おまけに犬にほえられ、周囲にいた人たち大笑い。

そんなこんなで市場見物も時間となり、タクシーで帰る（帰りは 10 元）。とても楽しかった。

ホテル着 7:30、即朝食。われわれその他にも植林ツアーの人たちがいた。今はいろいろなツアーがあるものだ。しかしわれわれのような体験はできないだろう。

朝食後、雲崗の石窟、万人坑を見学。石窟へ行く途中、炭坑のそばを通る。黄土と石炭の粉じんで、視界がきかない。ものすごい。バスの窓を閉めていても、バッグ、うでは石炭の粉がどっさりついている。案の定鼻の中はまっ黒だった。

石窟はとても壮大ですばらしいものだった。おしゃかさまについての説明もわかりやすく、聞きやすく。

次に万人坑へ向かう。戦時中、日本軍が中国人を使い、石炭を掘らせ、死人や病気や老いた人びとを坑道にすて、うめた跡とのこと。万人坑でそれを眼にする。むごい。言葉がない……。いまだに世界中に恥ずかしいことをしている日本。どうなっているのか。戦争というものがそれほど人を変えてしまうのか。戦争、というもの……。重い気分を変え、地球環境林センターへ向かう。

一面緑に囲まれた地域に入る。とても目にやさしい。その中にセンターがあった。すばらしい建物だ。相当お金がかかっているらしい。

昼食後に F さんと散歩、ポプラの木陰を歩く。とてもきもちいい。あそこの温泉に入ったときのよう。

午後から労働。松の苗木のポットづくり。皆で頭をつきあわせ、せっせせっせとポットをつくる。苗木に“ガンバレ”、自分もがんばれ。

※ Iさんがカゼでダウン。Nさんが腹の調子が悪くダウン。だいじょうぶかなア。その分働け働け。

ホテルにもどる。今晚は市青年連合会主催の歓送会とのこと。

部屋にもどってシャワーをあびる。なによりの幸せ、きもちいい。

宴会がはじまる前に、昨日誕生日だったIさんの“お誕生会”。でっかいケーキつき。青年部のはかららしい。ロウソクに火をつけ“ハッピーバースディ”の合唱。おまけにホテルの歌手だという女の子がカラオケでまた歌う。ヤンヤヤンヤのかっさい。Iさんはとてもうれしそうだった。中国側のはからいや、皆の心づかいに胸が熱くなる。

今日はさほど“乾杯”がなく助かる。連日連夜、いや、連日連昼連夜だと大変だ。

その後、高見さんの部屋へ集合ということで、皆集まる。今回のツアーの総括のお話だった。今回はいろいろとトラブルがあったようで、遠田先生がいろいろな話をしてくださった。高見さんは、ゼロからのスタートができると、エネルギーにうれしそうに話していた。

GENの関係者の方々の中国での植樹にかける思いを、今回のツアーのなかでいろいろ“見て”“話して”“聞いて”、とても熱いものだということがわかった、ような気がする。勉強になることが多かった。また、このツアーに参加した方々のいろいろな考え方、思いも、お話しするなかでわかった（少しだが）。とても、いろいろ勉強になる。

当労組としてこのツアーは他にもやっているボランティア活動とは別な意味や目的等、どうして行くかを実務レベルでの行動の足がかりとして自分を参加させたのだが、自分としてその使命を果たせるのかどうか？ ボランティアとはなにか、自分としてはまだわからない。が、そんなむずかしく考える必要もないのだろうか。自分がなにをできるのだろうか。なにかしたいでいいのかも（今回はとりあえず体験ツアーで良いと思う）。とにかくいろいろ勉強し、考え、行動していきたいと思う心は強まった。

このツアーの主催者 GEN と参加者のみなさん（Iさん、Iさん、Kさん、高見さん、Tさん、Tさん、遠田さん、Nさん、橋本さん、Fさん、Mさん）、そして、中国の方々、みなさんと知り合え、大変うれしく、勉強させていただき、大変ありがとうございます。自分にとってこのツアーとともに大事な宝ものになることと思います。もう何日もありませんが、このすばらしい人びとのネットワークを楽しみ、これからにつなげたいと思います。

中国は大きい、可能性はまだまだある。自分もそうありたい。

PS。コカ・コーラが中国にあって大変うれしかったが、コカ・コーラは冷たくして飲みましよう。

◆「第1班のところだけ」出沒、といていた編者ですが、ここでぜひ一言。「コカ・コーラは冷たくして飲みましよう」。そのとおり！ 農家で昼間っから白酒はやめとこうとコーラを頼んだら、どんぶりばちになみなみと湯気をあげているコーラが登場、それをひしゃくみたいなものでグラスにいっぱい注がれて……飲めたもんじゃないよう……。ちなみに話にだけ聞いて

ていた砂糖湯攻撃にも、今回はじめてあいました（私じゃなくてOさんが、ですが）。農村では砂糖は貴重品。もてなしの“気持ちだけをもらう方法はないものでしょうか……。◆

【T・F記】

朝食のあと、8:30（きのうの晩では8:10）に“雲崗石窟”の見学に出発。メンバーはいつもの人ではなく、Tさんと、Iさんは抜けている。西へ16kmぐらいのところで、30分ぐらいで着くらしい。女性のガイドさんが説明をしてくれるが、みんな聞いているかな？

行く道は、有名な炭坑の町らしく、石炭をオート三輪等に、これでもかというほど積んでいくもの、2両連ねたでっかいトラック等、バンバン走る。そして、大きなかたまりの石炭を落とす。私の両手にも余るほどのものも多くあり、かごを持って拾う人、車に踏まれて粉じんとなるもの。こうしてメモをとっていても、すぐ紙がまっ黒になり、何度も払い落とす。

ガイドさんによれば、まだ376億トンの埋蔵量があり、あと190年掘れるらしい。でも今年のように暖かいとあまり売れず、不況とのこと。いずれも同じか？

大同市は人口50万人、平屋は炭坑で働くアルバイト用、社員になればりっぱなアパートに住んでいるとのこと。これは階級差をもろに感じさせる。

右手側の山はハゲ山に近く、国家プロジェクトにより、何度も「ねず」の仲間が植えられたそうだが、全くうまくいっていない、と高見さんのお話。なにせ、上記のごとくの空気汚染にもっと強いものもあったらうに……と言われていた。

30分ほどで到着、10時まで見学。ガイドのお姉さんに5窟、6窟を案内してもらう。

本当にすごい数の仏、大きさ、彩色、ストーリー！ よくぞ、よく残っていてくれました、が私の印象。中国共産党が「いらぬ」なんて言っていようものならなかったかもしれない、と思うと、誰にむかうものでもないが、感謝！

それからすぐ「万人坑」へ向かう。遠田先生が日本軍の作戦説明。日中戦争の盧溝橋事件、1937年7月7日発生から北京をおさえるべく、大同市をまず占拠する。そのときの食糧等、現地調達（略奪）して南下する。そして、炭坑をおさえ、出炭量をあげるため、南の方から労働者を集めた。その労働はきつく、たくさんの人が倒れた。病気もあり、本当に酷使されたのだ。その結果、死んだ人、話によればまだ生きていても働けない人等を、廃坑にうち捨てた人びとが、6万人もいると言われている。その1か所が、ここである。三光作戦と名づけられた、うばいつくす、焼きつくす、殺しつくすと言われたほど、メチャクチャ、日本軍はしたのだ。

その途中、このツアーではじめて耕耘機を見る。牛、ろば、らば等でやっていて、この光景はなんだか、父を思いだしてしまった。

踏切で車が止まって動かず、馬号は他の道に行く。そして大きな交差点で王さんが降りていった。なんと、交通整理のおまわりさんに右折の許可をもらいにいったのだった。しかし1時間走ってもまだ街の中、おきまりの警笛の嵐、少々疲れた。そしてやっと着く。この地形では、私の最も苦手な山登りをしなければ万人坑は見られないらしい。手配してあった大きな花輪を受け取り（Iさんか誰か？）、私は重いリュックを背負いながら、登る。はあはあいいながら、やっとたどり着く。前に来た人の感想

が、Iさんたちの「ショックで、もう2度と行きたくない」等という話を聞いていたので、気も体も重くてよけい足が動かなかった。でも私としては逃げるわけにはいかないと日本にいる時から思っていたので、いよいよ中に入る。

累々と並ぶ死体、死体、死体、しゃれこうべの数がすごい。ミイラ化していたり、服もまだ確認できたり……。でも私にはあまりショックではないのだ。これはどうしたことだろう。高見さんが、中に書いてあった中国語を説明してくれる。そして花輪をささげて、全員で「もくとう」した。そうこうしているうちに、ショックでない理由が、私が10才頃見た、朝鮮の田舎での戦争後の記録映画のせいらしいと思ひあたる。わけもわからず、穴から次つぎ運び出される死体、それを待ち受けながら、体をよじり、泣きさげぶ女性たち。その白黒の映画が、「戦争」という言葉を聞くと、回り出す私だった。このとき、あの映画のなぞが解けた気がした。誰かに感想を聞かれて、「あんまりショックでないのがショックです」と答える私だった。

そして環境林センターへ帰り、昼食。ここの食事が、一番つつましいけれど味はおいしい。1:00~2:00まで休息。2:00から、環境林中心で作業。その前に、高見さんが案内してくれる。広さ3.5ヘクタール、約1万坪。温室(10万元)があり、中には、たくさんの植物があった。気のつくままに書き出しました。

あおき、ゼラニウム、バラ、イチョウ、シャクナゲ、つつじ、キウイ、おりづるラン、ゴムの木、シクラメン、トマト、ちゃわんバス、なでしこ、さくら、カラコエ、サルビア、アジサイ、ピーマン、カボチャ、カーネーション、けし……まだあると思う。中の温度は37℃。一番高いもの、タンザニアで開発された「ささげ」。

ビニールハウスも3棟あり、5万元でつくれるそうだ。少し前に竜巻で1つこわれたらしいが、もう修復されていたみたいだった？

ここは以前は国営の農業実験場のようなものだったそうだ。いたるところ、パイプや土管が走り、スプリンクラーで散水していたらしい。〈イスラエル方式〉が失敗。スプリンクラーの散水は、ここの土にはとても合わない、すぐ気づくはずなのに、誰が取り入れたのか？ おかしいね。

あんずの花がきれいだ。あんずの苗も台木用にたくさん植えられている(3万本)。また新しいりんごの品種の親木、りんごなし、サージ30種類もあり、高見さんたちのここに合う植物を1つでも多く見つけたいという、熱情を感じる。

また温室の裏に資材置き場がある。砂、木炭、軽石、川の砂等、土質改良に使うとのこと。

そしていよいよ、ここでの作業。説明を聞いて、5種類の土で、油松と樟子松の苗をポットに移す。最初は、大きいよりも、小さいポットでつくるが、実験用ということで、大きいのを作り直す。1種50コ、結局750コつくる。体の不調をうったえる人が2人もいて、15人ぐらいの作業となる。完成は4:15分頃でした。みなさま、ご苦労様でした。センターの人たちはなれているのだろう、とてもテキパキと手伝ってくれました。センターの印象は、5色の旗が風にはためいて、なんだかチベットに来た気分になるづくりだ。

このセンターの全体の完成度はまだまだで、ベッドも入っていないし、地下室は水が上がってきて、遠田先生も思案中とのこと。でも、もうすぐ泊まれるらしい。6:00頃、雲崗賓館へ

帰る。

夜は青年団の人たちと歓送宴会。大同事務所の人たちが来るらしい。6:30から始まる。行くと、Iさんが誕生日（4月20日）の大きなケーキを前に、紙の王冠をかぶって、祝福を受けていた。レーザーカラオケで、「ハッピーバースディ・トゥ・ユー」を歌って、おいわいする。中国側の人も、「祝你生日快樂、祝你生日快樂」とすばらしい歌声でうたってくれる。何度も！あとは「乾杯、乾杯」で私は飲みすぎ。

最後に高見さんの部屋へみんな集まって、今回の最後（最初かも）のミーティングをする。中国の人たちに緑化の思想をどのように伝えてきたか、政府の役人がすぐ変わって指示が引き継がれていないらしいし、その責任はどこにも追及できない……まして技術者の未熟さに、高見さんも遠田先生も頭にきたのが、今回のツアーだったそう。遠田先生が「トサカにきた」と言われるのを聞くのは、少し「ビックリ」。

きのうの高見さんの私への痛烈な批判は、なんだか「帳消し」かなと思いながらメモるが…酔いが回っていけない。目をあけているのがつらい。もうダメ。あしたこれを書くつもりでゴメンナサイ。

大同駅までていねいなお見送りを受け、22:00、定刻に汽車は出発する。みんなとの再会を願いつつ、それでも酒は回っている。ありがとうございます。家に帰ってこの旅をゆっくり振り返りましょう。

それでは、次のMさんへ。

●4月22日（水）

【M・A記】

大同から夜行列車で北京へ到着。定刻通りの6:40でしたが、あいにくの雨!! それも結構降っています。ショック。

あまりおいしくない朝食をすませて、各部屋へ。10時に観光へ出発です。どんな1日になるのでしょうか。

土砂降りの雨の中を出発しましたが、少しすると雨も上がり、まあまあ行動できました。故宮見学の人と、その他モロモロに分かれて、お昼近くに合流して昼食、その後王府井へ出かけてお買い物ツアーでした。

夕食は王さんご夫婦と一緒においしい食事をいただきながら、楽しい時間を過ごさせていただきました。はじめは長く感じていた1日が、目を追うごとに早く感じるようになって今日になってしまいました。このツアーでいろいろな体験をして、自分にとってどんなことがプラスになったか、今晚は考えながら眠りにつきたいと思います。おやすみなさい、また明日。z
z……

●4月23日（木）雨

【M・A記】

今日も雨です。最終は2日間ということで、またまた私が書いてます。

朝は 6:30 に集合したのはいいけれど、朝食は 7:00 からということで時間つぶしでした。王さんのお見送りで 7:30 ごろホテルを出発していただきたいスムーズに空港での手続きを終えて、少し待たされながらも皆、全員、飛行機に乗れました。ホッ……。 But、乗り込んだのはいいけれど、ずいぶん遅れて 11:15 分ぐらいにやっと離陸しました。フライト時間は 3 時間ということで、何もなければ元気に関空へ到着です。

みなさん、ご苦労様でした。&ありがとうございます。

いろいろと問題ありのツアーでした。個々に受け取り方は違うと思います。私は何よりみなさんと出会えたことが一番良かったです。そこからネットワークを広げ、協力できることがあれば、お手伝いしていきたいと思います。

尚……………

また、みなさんとご一緒できることを願いながら終わりにしたいと思います。お元気で、さようなら。

少しゆれる CA927 の機中にて。

すごく（後になって変更）【F・S記】

勝手にFが書きます。担当はTさんなので、Tさんよろしく。

日本時間 13:20、機上の人となり、飲みもの、機内食のサービスをうけ、時間を持て余しているの、これを書いています。

この旅は、さまざまな点で衝撃を受けました。大阪人がせっかちなこと、北京と二百数 km しか離れていない大同はカラカラの天気なのに、北京は雨（22、23 日）。そんなわけで晴れた北京を見ていません。

日本も数十 km 違うだけで気候がガラリと変わるけれど、これほどダイナミックに変化するのには久しく感じていませんでした。

また、共産党指導下の中国における貧富の差。

天鎮県の農村の昨年の年収が 150 元程度と聞かされていたなかで、22 日、スーパーへ買い物に行くと、カートに山と食料品を積み 400 元以上も支払っている中国人を見たのは正直なところ、ショックでした。日本でも所得較差はあるけれど、中国ほどひどくはないのではないのでしょうか（あ、所得ゼロの私と他のみなさんとはずいぶん較差がありますね）。

21 日の万人坑も凄かったです。戦後生まれの両親に育てられ、今日までノー天気生きてきましたが、自分が立っているその場所が、50 余年前には自分と同じ日本人による略奪の地であったことを知れば、言葉を失ってしまいます。環境林センターへ行く車中では無言でした。

もう少し時間をかけてゆっくり総括すればいいと思いますが（実際そうします）、頭のなかで今回の体験がこなれる前に小括しておこうと思います。

Nさんとも話しましたが、ボランティアって何だろう、という点にかんしては、心、物、両面において余裕のあるときに、楽しみながら、あるいは無理をしない程度に手助けをすることなのだろうということです。今回も、子どもたちと楽しく植樹（“林”ではないですよ。5 本とかその程度では）をしましたが、これが 1 人何本、とかいうノルマがあっては楽しくなくな

ります。また食うものに困っている状況では、他のことに目を向ける余裕がなくなりますもんね。高見さんや遠田さんが、“何故木を植えるのか、幹部らが理解していない”と何日目か怒っていましたが、植林の好適地は耕されてしまうとも言っていましたが、生活するのが精一杯で、その重要性にはなかなか気づかないのだろうと思います。

人それぞれ思うところは違うと思いますが、23才3か月生き、はじめてワーキングツアーに参加した私には、そんなとらえ方ができると思います。

それでもまだ、今回の旅はボランティアではなく、やはりツアーなのかなあ、なんて思います。ただ、それはあちこち回り、日本に帰ってそのままにした場合。友人その他に、的確に現在の黄土高原の状況を伝え支援を呼びかける等々、自分で動いてこそ、ボランティアになるのかなあ、と感じます。当然私もこれからなんらかの形でGENと関わっていきたいと思いますが。活動はこれから、ですネ。

もうひとつ、これは個人的なことですが、自分が少し変わったこと。いわゆる内弁慶の私は、自分から新しいことに首を突っ込む勇気がありませんでした。そのため初めての人と初めての土地に、初めての活動をする、というのは、それこそ清水の舞台から飛び下りるくらいの覚悟でした（少しおおげさかな?）。今回参加できたことで、これからいろいろなことに参加できるでしょうし、女の口に声をかけるのも、もっと気楽にできるかと思います。

乱筆乱文にて読みにくいと思いますが、一緒に参加したみなさん、現地スタッフの方々、旅の便宜をはかってくださいました事務局のみなさん、本当にありがとうございます。再見！（乱気流のなかを飛ぶ機内にて）

以上は、1998年3月26日～4月4日および4月16日～23日におこなわれた緑の地球ネットワーク主催の黄土高原ワーキングツアー参加者が、ツアー中交替でつけた日誌をまとめたものです。一部の漢字、かなづかい、句読点、固有名詞の誤記などあらためたものもありますが、文章表現は原文のままです。

1998年6月

緑の地球ネットワーク